

写真1 多雪山地のモザイク状の植生景観

天然の山菜・キノコ採り ― 多様な森の環境利用、 収入も楽しみも ―

山菜・キノコ採りも収入も楽しみも

森での山菜・キノコ採りは、農山村の人々の食文化を支え、レクリエーションとしても重要です。しかし、木材生産に比べて山菜・キノコの採取や流通は個々人により行われるため、その恵み（生態系サービス）の大きさや環境利用の実態把握が困難でした。そこで、天然林が広がる福島県南会津郡只見町の複数集落を対象とするアンケート調査と、のべ17名への2年間（2009～2010年）の採取日誌調査により、採取の実態を捉えました。さらに、主な山菜・キノコの種類ごとの販売単価と採取重量を掛け合わせて経済価値を試算しました。

只見町では、60代以上の男性を中心に、ブナ林・溪畔林、雪崩低木林などがモザイク状に分布する植生や微地形（写真1）を利用して、時期ごとにさまざまな山菜やキノコが採取されていました。町内の成人一人あたりの年間の収穫は、春（5月、6月）と秋（9月、10月）のピーク時で、直販所



松浦 俊也

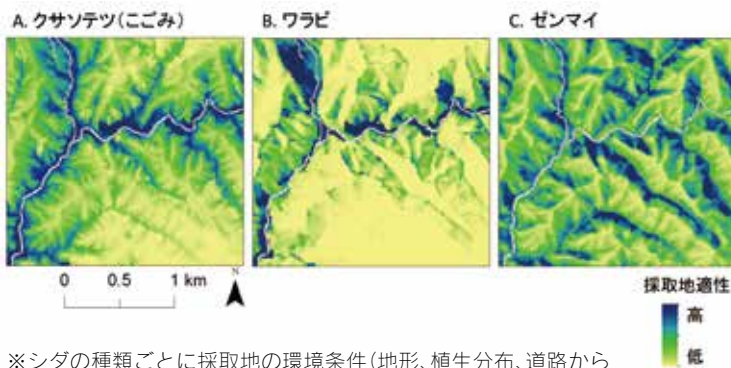
森林管理研究領域 主任研究員

の単価換算で平均1〜2万円、インターネット通販の単価換算ではその2倍以上の経済価値となりました。また、採取の理由は、収入もさることながら、季節の味覚、健康増進、探す楽しみ、人に贈って喜ばれることなど、貨幣収入以外の要素がより大きいことが分かりました。

山菜採りの行動を解明

採取者にGPSロガーを配布してクサソテツ(こごみ)、ワラビ、ゼンマイの食用シダ3種の採取活動を記録し(図1)、地理情報システム(GIS)と統計モデルで採取地の特徴を捉えました。その結果、こごみは沢沿いの緩傾斜の草地や林床(写真2)、ワラビは伐採跡地や若齢スギ植林地、ゼンマイは北東向きの雪崩斜面の低木林(写真3)でよく採られ、とくにこごみとワラビは道路付近でよく採られていました。山村の人々は山での豊かな経験と知識にもとづいて山菜の生態や分布の特徴を捉え、さまざまな種類をそれぞれの適地で採取していることが分かりました(図2)。このように地域の人々の「賢明な」森林利用を可視化することによって、生活に根ざした森林管理や計画につなげたいと考えています。

東日本大震災における東京電力福島第一原子力発電所の事故以降、野生の山菜・キノコは種類や場所によって出荷や摂取が制限されるようになりました。安全性を確保しつつ豊かな生態系サービスの「賢明な」利用を継承していくことがこれからの重要な課題です。



※シダの種類ごとに採取地の環境条件(地形、植生分布、道路からの距離等)を捉え、空間解像度20mで採取地としての適性を推定。白線は道路。

図2 食用シダ3種の採取適地図



※ロガーは消しゴムほどの大きさで、ポケット付の帽子に入る。

図1 GPSロガーによる採取活動の記録



写真3 残雪の雪崩低木林でのゼンマイ折り



写真2 沢沿いに群生するこごみ(クサソテツ)